
space war period GEARD

storick

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

space war period GEAR D

【Zコード】

Z6365A

【作者名】

storybook

【あらすじ】

文明を発達させた地球人はラク拉斯星系という所へ大移民し、そこで暮らす事となつた。しかし平穀は長く続かず、ラク拉斯星系全てを巻き込む宇宙大戦争へと発展してしまつ。これは、戦争という場で苦悩する若者達の悲しい戦いの物語である。

プロローグ

宇宙。それは無限に広がる未知の世界。
人類は長い間、宇宙へ進出する事に手間取った。

しかし、その宇宙に何と人の形をした「物」が飛びかっていた。
一つだけではない。その数は

10や20を越す。その人の形をした物はいずれも銃のよつた物を持ち、銃身からは光の粒子 ビームが飛び交う。

それは正に映画でしか見た事のない夢の光景。だが、これは現実の出来事なのだ。

『おいルース、今日は調子いいみたいじゃないか』

通信機から男の声が操縦席に響き渡る。それを聞いて鼻で笑う少年はモニターに映る人型を一機、ビームで

打ち落とす。爆発の閃光が眩しい。

少年の名はルース・ドラッド。蒼い髪と蒼い瞳、歳は10代後半、線の薄い輪郭は美形のそれを感じさせる。

「おいジョン、賭けてみないか？」

ルースは先ほど通信してきた男、ジョンに威勢のいい弾んだ声で通信する。すると何もない所から

四角いものが浮かび上がり、映像が映し出される。空間映像システム・ヴィジョンと書いて、簡単に言えば

何も無い所から出て来るテレビ電話のようなものだ。特殊な電波が通っている所なら何処でも使用できる。だが

本当に何もない所から出せる訳ではなく、機材が無ければ使う事が

出来ない。

そしてそのヴィジョンには盛り上がる金髪のアフロで、二口二口顔の男が映されている。この男がジョンである。

『何を賭けるんだ?』

「今日何機落とせるか勝負しないか?」

そんなのんきな話をしている間にも、ルースは抜群の技術で次々と敵軍の機体を撃破していく。

『おもしれえじゃねーか! 今日こそお前を超えて見せるぜ』

ジョンは意気揚揚と、集中する為にヴィジョンを切る。
そんなジョンを見てルースは余裕の笑みを浮かべる。

「あんなに張り切っちゃって、…その後に負けた方が今日の昼飯おごるつて言おうとしたのに…」

先走る友の安否を願い、ルースは無限に広がる宇宙を人型戦闘兵
アーダ
GEARDで
駆け巡つていった。

それは壮大な戦争の物語

人類はその科学力を一気に発展させ、地球を死の星へと追いやってしまった。そして一度と

地球のようにしまいと地球の全ての物を破棄し、新たな住処を見つける為に大移民を開始した。

そして何十年もの月日を重ね、ようやく見つけたのがラクラス星系だった。

ラクラス星系の惑星で原住民との交流を果たした人類は今やラクラス星系の一員となつた。

だがある時、道を間違つた者達が現れた。

その名を宇宙改革軍レノス。

彼らはギアードを創りあげた共和連盟センドラドを悪と称し宣戦布告をする。

時は宇宙戦争時代の幕開け、ラクラス星暦1063年。

それから時は過ぎラクラス星暦1093年、いまだに戦争は終わらない。

泥沼化した戦争の中、人型戦闘兵器ギアードは発展に発展を重ね戦争の火種を一気に拡大させ、まさに宇宙全土を上げての大大戦争を繰り広げているのだ。

両軍の戦いは、更に激しさを増していく

#1 · Departure vol.1 (前書き)

新作です。拙い文章でありますがどうかお付き合いく
下さい。

「くつそーーー！ また負けた ！ … それにお前、昼飯おごりながら早く言えっての！」

ジョンは渋々これから自分の金で払わなければいけないテーブルの上にあるフライドポテトをかじる。彼の目の前では忙しそうに大量の食べ物を口の中に放っているルースの姿があつた。彼は自分の財布の中身は気にしなくていいので存分に胃の中を満たしている。

ここにはルース達の所属する、惑星レードを管轄している部隊「セイバース」の基地の食堂。

セイバース隊はセンドラド軍に属する部隊で、日夜レード星に攻め込むレノス軍と戦っている。

この二人はセイバース隊でもトップの実力であり、ルースはセイバース隊で若いながらエースと言われるほどの腕前である。

「まあ、 そうほめんなつて
「クソがあ！」

憎たらしいルースの態度に、ジョンは激怒するが彼らのテーブルの前を通る美人によつて

それは消化される。短く切りそろえた黒い髪は彼女に合い、特徴なのはその

右耳の前に長く垂らした髪がある所だ。顔は落ち着いており大人の雰囲気を漂わせている。スーツは

セイバースの軍服で紫色のスーツもまた彼女に合っている。ジョンは口を開けたまま彼女を見つめていた。

「ヒュ、とびっきりだな」

ジョンが口笛を鳴らした頃には、彼女は食堂にはいなかつた。ルースは彼女に違和感を感じていた。

「セイバース隊に、あんな人いたっけ？」

彼の言う通り、彼の記憶にはセイバース隊にあのような美人はない。だがジョンは全く気にしなかつた。

「別にいいじゃんか。うち等の女共とは大違いだぜ」「だ」れが、大違いですって？」

「！…！」

ジョンの背後より、ドスのきいた女の声が聞こえる。彼が振り返るとそこには茶髪のポニーテールと、左目の中のほくろが特徴の女性が立っていた。つなぎを着ている事から彼女はギアードの整備士か何かを連想させる。そして彼女の目には、自分への愚弄に對しての怒りが燃えていた。

「オッス、ターニア（…怖！）」「はあい、ルース」

その二人の挨拶とは対称に、ジョンはターニアの視線に完全に負けて、その隣に座る彼女に怯えきついていた。彼は今日寝る時、枕を噛んで恐怖に怯え枕を濡ら

すだろーつ。

ルースはターニアに先ほどの女性について訊いてみた。

「ターニアは分かるか？ サツキ食堂通つて行つた女人」
「どんな人？」
「美人！」

即答するジョンをターニアはエルボードロップをかまして黙らせた。

「そうだなあ……あれでこれで……」

ルースはターニアに先ほどの美人の特徴を説明する。しかしターニアは首を傾げるばかりだ。

「うーん……悪い、分からないな」
「そつか。それじゃあ新しく入った人なのかな？」

それつきり美人の女性についての話はなくなつた。

「…そうだ、聞いてくれよターニアあ！」

突然、ポテトをかじりターニアに押し寄せるジョン。少し涙ぐんでいるのがいい歳して子供っぽかつたがターニアはそれが少しウザかつた。

「なつ、何だよ！？ ちょ、ウゼーよー」
「それがさあ、今日のレノスの奴等とでさ、ルースが昼飯賭けて何機落とせるか勝負したんだよ」

「お、ジョン、それじゃあ俺が無理やりやらせた感じじゃんかよ」

ルースはフライドポテトを咥えながら、テーブルに身を乗り出してジョンを責めた。しかしそんな二人を尻目にいきなりターニアが笑い出した。それにジョンは驚き、ルースは首を傾げる。

「タ、ターニアさん？」

「どうした？」

「アッハハ…そりやジョンが負けるって。いつもそうだけど、ルースの『スピニオン』、好いパートが手に入つてさ。ちょっといじつてたんだ…」

「「なにいー?」

二人はターニアの告白に驚いた。スピニオンとはルースが駆る愛機のギアードである。高速戦闘用で敵味方共にその戦闘時の姿は『青き一閃』と呼ばれ恐れられている。

「んつ？」

ルースが振り向くと、そこにはただならぬ殺氣を放つたジョンの姿があった。その顔は笑っている様に見えるが、まったくの作り笑いである。

「金、返せ？」

ルースはジョンに恐怖を感じた。こには何としても逃げなければ…というルースの考え出された結果は…

「あっ！ やつきの美人の人！！」

「ナニイイ！！！？」

ルースの指差す方向に、ジョンは異常な速さでそこに走りこんだ。
…しかしそこには
誰もいなかつたのだった。

「おいルース、居ないじやないか！」
：あれ？」

ジョンの振り向く所には、ルースは居なくターニアがそこに立つていた。

「おいター二ア、ルースは？」

ターニアは、ジョンの頭の悪さにため息をつかざるを得なかつた。
当の本人は
まつたくわかつていな様子だ。

「バカか、お前は。ルースならとっくに逃げたぞ」「なつ……。あ、あのヤロウ！」

ジョンの叫びは、食堂全体に響き渡つたという。

「イイイイイイヤツホ――――――！」

一方その頃、ルースは戦闘機型飛行ギアード・Hベリィで空のフライ特を楽しんでいた。いわゆる

脱走という奴である。

ルースの顔は何ともいえない開放感を表していた。それはまるで

無垢な子供が遊んでいるかの

よつた、そんな感じにさせる楽しそうな顔であった。

「フウ、まつたく、何か変だと思つたんだよな～今日のスピーロンは。まつ、どうせパワーアップしなくともジヨンの奴なんかに負けないけどな」

と、言葉では平和的なのだが、ギアードの方は恐ろしく難度な飛行を繰り返している。上空から急降下して、地面ストレスで浮き上げてから機体を2回転させる。誰が見てもぞつとする光景である。そんなアクロバット飛行をを軽くこなしてしまったのだからルースはセイバース隊のエースなのである。

「やつぱ、飛んでいるとスッキリするぜ～　よーし、もつとぶつ飛ばすぞー！」



ところ変わつてセイバース基地の「隊長室」。そこには別名「鬼の隊長」と恐れられている隊長エオード・オーグが座していた。スキンヘッドに黒のサングラス、鬼髪面。そしてその厳しさ故に「鬼の隊長」と恐れられている。そこに、ルース達が食堂で見かけた通つた美人の女性が何やりエオード隊長と話しがしている。

「なんと…レノスが密かに軍備拡張を…！」
「はい」

その女性の情報に、エオードは驚きを隠せないでいた。

「ううむ……奴らめ、最近手応えが無かつたのはそのせいだったのか？」

その時、電子音と共に隊長の前にヴィジョンが現れる。ヴィジョンには慌てた様子の隊員が映っていた。

「た、隊長！」

「何だ、今は会議中だぞ？」

隊員はどこか落ち着いていない様子で、報告にためらっているような感じも受けれる。

「そ、それが…」「どうされたのですか？」

丁寧な口調で女性は隊長に語り掛けるのだが、まだ隊長は隊員から事を聞いている。そして：

「なにい！？ まあたルースが勝手にギアードを乗つて出ただとー！？ 貴様ア、どうしてもつと早くそれを報告しなかつたあああひ、ひいいいいいい！」

正に鬼の形相でエオードは激怒した。隊員はそんなエオードを見て失禁寸前で責ざめる。

女性は近くにいるにも関わらず怒るエオードを恐れもせず、出てきた名前が気になっていた。

「ルース？」

「～～」

勝手にギアードを持ち出したとされているルースは、お気に入りの曲をかけてフライトを楽しんでいた。曲は「BLOW SKY」というロック系である。

「ブルー ブルー」

『ルウウウウウス！－！－！』

「！－！－！」

突然の通信、そして大声で一瞬ルースの意識は飛んだ。

機体は急落下して、地面ストレスの所でルースの意識は帰ってきた。

「だつ、だれだあ！ もう少しで死ぬ所だつたぞ！」

ルースが叫んだときには田の前にヴィジョンが出ていた。そこにはエオード隊長が映っている。それにルースは絶句した。

『誰に口を聞いている？』

「隊長
！－？」

もう言い逃れのできないルースは、死を覚悟した。

『貴様…これで何度目だ！？ ギアードで出れば敵に気付かれるかもしれないというのに、貴様は

いつもいつもいつも… 脳が湧いてるのではないか…?』

「『』、ごめん、ごめんって隊長…」

ルースは誠心誠意を込めて謝るのだが、謝り方も過去のものと全く同じだった。エオードは溜め息を吐いてこれ以上は時間の無駄だと悟った。

『…もういい。さっさと戻つてこい』

「わっかりましたーー』

ケロッと態度を変えるルース。ヴィジョンに映るエオードはもう諦めているのか深い息を吐くのだった。

その時、ルースの機体の中でWARNINGの文字が出てけたましい非常サイレンが操縦席に鳴り響く。

「あ、隊長。敵に発見されちゃった」
『何イ！？ だから言つただろう！…』
『じめんつて！ … 2機、2機だ。速さから言つて多分フライヤだと思つ』

レーダーに反応する二つの点が、徐々にじりじりと迫ってきていく。

『高速飛行型のフライヤか！？ お前の乗るエベリイでは歯が立たん！ 2機は無理だ、逃げろ！…』
『隊長、フライヤ相手じゃエベリイで逃げるの無理だって。とりあえずやってみるわ』

『何！？ オ、お前まさか…ルース！ 無茶はよ』

途中でルースはヴィジョンを消した。舌なめずりをして、これから起ころるだろう戦闘に胸を躍らせるような表情をしていた。

「へへへ、2回戦の始まりってか？ 面白くなつてきやがつた！」

戦闘機型ギアード・Hベリィは全速で敵のいる方へと飛んでいった。

#1 · Departure vol.1 (後書き)

始まりましたGEARD、いかがでしたでしょうか?
まだ始まつたばかりでいかがでしたかは無いとは思いますが…。
次回はいよいよバトル開始です。

レード星の宙域にはセイバース隊の監視衛星がいくつも漂っている。当然敵が来るものなら

探ししてセイバース隊の基地へと情報が送られるのである。

その監視衛星に不穏な影が迫っていた。それは誰が見ても圧倒される大きさ、クジラを思わせるそのフォルムは1000mはある。それは超巨大戦艦であつた。赤く塗られた機体は多くの軍人の血を吸つたかのようである。

その中のブリッジでは、ルースの乗るギアードがモニターに大きく映し出されている。それを豪華なシートに座った女性が見ていた。

その女性はとても人とは思えない美貌を兼ね備えていた。長く伸びた美しい金髪の髪は神秘的な物を感じさせ、大きく開けた胸元からは豊満な谷間が見られ男なら誰もが唾を飲み込む程艶かしい。そしてどの宝石よりも美しく見える蒼い瞳は見るものを魅惑し、吸い込ませるだろう。女神でもあり悪魔とも言えるその絶世の美女は、指令する位置にいる事から「アーリー」の戦艦を指揮する者である事が見受けられる。

「どうなるかしらね？ 彼、一機のフライヤ相手にあんなギアードで勝てるかしら」

金髪の女性は、座り心地のよそその椅子に座りモーターを楽しに見ている。すぐそばのオペレーターは彼女の言葉に苦笑する。

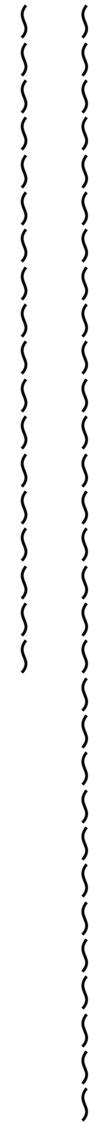
「大佐、いくら奴が「青き一閃」であつてもそれは無理な話です。

あのよつなギアードでフライヤを…」

「いえ、もしかするとやるかもしないわよ。」

その女性の微笑みに、オペレーターは少し戸惑う。

女性の表情は、既に結果が見えているような感じだった。



「うわ、やっぱフライヤだよ」

あと500mまで迫ったルースは敵の機体を確認する。

フライヤ

高速飛行型ギアード。一見エイのよつな体型を思われる機体で、変形機能が搭載されており人型にもなれる。レノス軍では大量に量産されている機体で、そのスピードはギアードでも上の域にある。

『なんだあー？ 普通の戦闘機タイプじゃねえか。楽勝楽勝！』

意氣揚揚とフライヤに乗るレノス兵はルースの乗るエベリィに迫る。そのスピードはエベリィの2倍はある。青い機体の色は、まるで空に溶け込むようだ。

「やれやれ、こいつは普通も普通、民間にも使われててるよつな奴なんだぞ？」

ルースの嘆きも空じぐ、フライヤは攻撃を開始した。

「わっ、わっ！」

フライヤは前方にある機銃で、エベリイを威嚇するかのように弄ぶ。いくら威力のない機銃といつてもルースの機体では洒落にならないのだ。

「くっそ！ やってくれるじゃねーの…」

『へっへ！ そろそろ落としてやるかあ？』

フライヤから今度はレーザーが飛び交う。それを当たる寸前でエベリイは避ける。

『なにい！？』

『ふうー。…奴らを倒すにはこの…』

ルースは、モニターで自分の機体の武器を映す。そこには誘導ミサイルが一基搭載されている。

「本当はビームもあるんだけど、急に持り出したからエネルギーが充填されてないんだよなあ。これしかいか…。エベリイってあまり武装が無いからな。…よし…！」

ルースの目の色が変わる。それはいつもの陽気な彼の目ではなく、戦闘の世界の殺伐とした目だ。

『いのやうー。落ちる雑魚が！』

必死に攻撃するレノスの兵士だが、2人がかりでしかも戦闘力も上のギアードを操っている

にも関わらず、ルースの操縦するエベリイには一度も当たつてもい
ない。

「チャンスは一度、一機が交差する一瞬で！」

レノス兵の動きは、ルースの周りを旋回しながら攻撃するとい
ものだった。ルースは
数十秒程度で敵の攻撃パターンを見破った。

『何で当たらないんだあ！？』

「今だ！」

一機が交差した瞬間、ルースはミサイルのスイッチを押した。機
体の両サイドに搭載されている
ミサイルが、ボシュ、という音を上げてフライヤ用掛けて飛んでい
く。

『わっ、わあああーー！』

『ぐるなっ！ ぐるな

』

レノス兵の叫びも空しく、誘導ミサイルが後を追つて見事に命中
した。爆発と共に
フライヤは広い森林地帯に落ちていった。

「YES！ ふいー、ギャンブルだったなあ、今のは

安堵の息を吐き、ルースは殺伐とした表情から元の笑顔に戻り、
エベリイをセイバース隊の基地へと
帰還するのだった。

「そ、そんなバカな…！」
「だから言つたじゃない」

レード星に近づいている巨大戦艦のブリッジ、驚くオペレーター
とは対称に予想通りとばかりに
金髪の女性は微笑んでいる。

「あんなオンボロで、フライヤー機をた易く撃破するとは…」
「…やてと」

椅子から立ち上がる金髪の女性。スラッと伸びた綺麗な足は他の
女性が見れば
嫉妬する程。女性は通信機に手を回した。

「どう？ 準備はできた？」
「問題ありません。いつでも回線をジャックできます」
「フフ、それじゃあ回線開いて」
~~~~~  
「ルース・ドラッグ、入りまーす」

戦闘の後、ルースは隊長に呼び出された。どうやら、彼にもレス  
スの軍備拡張を  
伝えようと隊長は考へているようだ。彼が扉を開いたのは隊長室の  
扉。そこにはジョン、ターニア

隊長、そして昼の食堂を通った女性がいた。

「うおっ！？ どうしたんだよみんな集まつて…それにアンタは食堂にいた…」

「ルース、この人は…」

ジョンがルースにその女性の事を紹介しようとした時だった。

『ここにちは、惑星レードのみなさん』

「…!?」「…！」

突然、隊長室に澄んだ女性の声が聞こえる。その声はあの金髪の女性なのだが、ルース達が知る訳無かった。

『私はレノス軍レブドア隊隊長、レサティア・ヴォルゲイン大佐と言います』

「レノス！？」

そのあまりにも突然の事にルース達は動搖を隠せなかつた。エオードはすぐにヴィジョンを出し

通信士を呼び出す。

「何だこれは！？」

『今、調べます！』

「いきなり何だつてんだ、無線か！？』

ジョンはターキアを見るが整備士の彼女は腕を組んでどんな方法でこんな通信をしてきているのか思案しているようだつた。

『突然ですが、失礼します。これから私達はこのレード星を制圧します。至る所を“消す”つもりです』

「何だつて…？」

声を上げたのはルース。あまりにも恐ろしい事を言つてサティアと名乗る者の口調は、いかにも楽しげな感じで、それが人を馬鹿にした風で聞く者を恐れさせ、苛立たせる。

『これは警告ではありません。“脅迫”です』

全ての回線をジャックしたのか、レサティアの“脅迫”はレード星全土に伝わっている。レード星の人々は徐々にその脅迫に恐怖を感じ始めていた。

街の喫茶店でも

『死にたくない人は、早く逃げてください』  
「なつ、なんなんだこれ！」  
「なんか、やばいんじゃないの…？」

街の大通りでも

『抵抗する人は、容赦せず“消します”』  
「やべーぞ！」  
「逃げろ…」

『まずは「大都市」から…消えてもらいましょうか？』

「うわああああ…」「…」  
「キヤアアア…！」

それを聞いた大都市の人々が、パニックに陥った。ハッタリと言  
い張っていた者もやがては  
他の人々の悲鳴で恐怖が感染して全ての市民が混乱を極めるのは、  
大して時間は掛からなかつた。

セイバース基地隊長室では、怒りに満ちたエオードがその突然の  
出来事に腹を立てて机に  
拳を叩きつけた。その目はこのよろづな事態を招いたレサティアへの  
怒りで覆われていた。

「奴らは何処にいる！？！」

『通信を逆探知した結果、敵はレーダー星の真上にいる事になります  
！』

「何故今まで監視衛星が気付かなかつた！？　何をやつていたんだ  
貴様らは！」

『も、申し訳ありません！　恐らく敵の戦艦は高度なレーダージ  
ャマーを搭載しているらしく、ここまで  
接近を許してしまいました！？』

今ここで部下の怠慢を叱咤しても意味が無い。エオードは怒りを  
抑え、冷静に状況を判断する事に  
する。隊員の通信は止まらず

『データに無い戦艦です！　お、大きさは1kmを超えます！！  
しかも今、巨大な熱源を探知！  
：これは恐らく主砲のものと思われます！？』  
「　」「　」「　」

今がどれだけ危機的状況に晒されているのかを実感し、ルース達は驚かされる。

「どうやら敵さん、マジみたいっスよ！ 隊長！！」

ルースはエオードを促す。それにエオードは領き立ち上がった。

「うむ！ 考えている暇は無い！ これより…」

出撃　　と言いかけた所でまたレサティアの通信が響き渡る。

『ああ、それとセイバース隊の皆さん。変な気起こさない方があなた達の身のためですよ？… それとも自信の方がありますて？』

最後には嘲笑も含めて、レサティアの通信は終わった。

皆はエオードの言葉を待っていた。怒りに身を奮わせたエオードは、静かに、そして力強く言い放つた。

「これより、セイバース隊は敵の迎撃に向かつ！…！」

「「了解！」」

## #1 · Departure vol.2 (後書き)

いかがだったでしょうか？ 次はいよいよ両軍入り乱れての戦いが始まります。果たしてルース達はレサティアを止められるのでしょうか？ ご期待ください。

セイバース基地・格納庫。そこにはセイバース隊のギアードの全てが置かれている。

緊急なのでその忙しさは半端でない。整備士班長であるターニアは整備士達に指示を出す事で忙しさを増していた。

「ほら……早くしないとゲームで灰になるよー。急いでギアードを収納！」

セイバース隊の戦艦、「ソードガッシュ」に、次々とギアードが搬入されていく。名前の通り剣に似た戦艦は約400m。赤く塗られたその船体は敵を切り裂き、血を吸つたような猛々しさがあった。

「はやくしろー！」  
「急げえ！」  
「合点ー！」

整備士達の声は、格納庫全体に響くほどだった。

### ソードガッシュ・ブリッジ

ブリッジはエオードの座る指令席があり、一つ下の段差にオペレーター、通信士、操舵士の席がある。更にその一つ下の段差には対空砲火などを操る者の席がある。どの席にも専用のテーブルがあり

そこにはヴィジョンを使った電子モニターが浮かび上がっている。前には180度の大きなメインカメラがあり、それで外の状況を肉眼で見る事が出来る。

「この人はセンドラード本部から派遣されたマリエーヌ・プラティカさんだ。今日から副司令兼オペレーターをやるそうだ」

ジヨンは黒髪の女性、マリエヌをルースに紹介する。

「よろしく、ルース君」

微笑んでマリエーヌはルースに右手を差し出す。ルースは新たな仲間に喜んで握手をした。

「ああ、よろしくな！ マリエーヌさん  
「フフ、『マリア』でいいわよ。“ルー君”  
「ルー君？」

マリエーヌもといマリアは自分をあだ名で呼ぶようにするだけでなく、自己紹介でいきなりルースにあだ名をつけた。

「ルー君って、俺の事つスか？」

ルースは何故自分にあだ名をつけたのか、その訳を聞きたがった。そうするとマリアはその名に相応しい微笑みで答える。

「ルースって聞いた時から決めてたの。ルー君って呼ばうって

「ハハツ、面白い人だなマリアさんって。うん、それでいいっスよ

大人びた容姿とは裏腹にその無邪氣さは可愛らしく思える。はにかみ合う二人を見て、端では

楽しく話しているのを恨めしく思うジョンの姿があった。

「話はそれぐらいにしておけ

「ういっス」

指令席に座っているエオードがルース達の方を見ないで注意をかけた。その一声ですぐにルースもマリアもスイッチを切り替えたように表情を変える。

「よし、現状報告！」

隊長席の下方にある席にいたオペレーターは、エオードの掛け声で手馴れた感じで浮かんだパネルを押して情報のあるファイルを開く。すると様々な文字の羅列が浮かび上がった。オペレーターはそれを読み上げていく。

「現在、敵のものと思われる巨大戦艦がレード星域に留まつている模様。主砲を大都市へ向けてチャージ中、恐らく後20分程で発射されるかと。監視衛星は2分前に破壊され、それ以前の映像に映つたものからギアードを15機ほど確認。大気圏を突破後すぐに交戦の可能性大！ 全隊員、乗り組み終了！」

「時間が無い！ 一番スピードのあるソードガッシュが迎撃に向かう！ 残りの戦艦は大都市を死守！

繰り返す、ソードガッシュは迎撃、他の戦艦大都市を死守だ！ ソードガッシュ発進ッ！！

エオーデの命令により、一気にソードガッシュは浮上して辺りに強風を巻き起こしながら発進した。基地を後にして：

レード星の頭上に迫るレノスの巨大戦艦「ヘルシャークナル」。そのクジラとも思わせるフォルムの尻尾ともいえる所にカタパルトがある。そこから次々とギアードが出てくる。既に戦闘準備は完了と言つた感じである。ブリッジにはあの金髪の美女、レサティア・ヴォルゲインがその光景を楽しそうに見つめている。その微笑みは天使のものか、悪魔のものか。

「敵艦、上昇してきました！ 距離4000！」  
「フフフ…やつてきたわね。【選定者】に相応しいか見せて貰うわ。  
「青き一閃」さん」

「うおおおおおおーー！」

猛ダッシュでルース達パイロットは艦内を走っている。行く所は無論格納庫である。無重力の宇宙空間にいても艦内で走れるのは重力制御しているからである。

「はい一着～！ 準備はOKかター二ア！？」  
「はいよ～！ 早く行つて来い！」

ターニアに一声かけてルースは自分の機体の下へ走る。約20mくらいの巨人はそこにいた。蒼く

輝くその人型のギアード【スピニオン】はルースの愛機である。通常このスピニオンの基本色は黄色なのだが、ルースの嗜好で特別に塗り替えている。スピニオンは人型でも飛行形態のフライヤに近づく機動力を持ち、最大出力で動くと閃光のように見えるので、「青き一閃」の異名を持つている。

「頼むぜ相棒！」

威勢良くハッチを開けてギアードのコクピットに乗り込むルース。起動スイッチを押すとスピニオンの目に当たる部分が光る。ルースは銃が握り締める部分だけになつたような2本のトリガーを握つた。

『GO!-!-』

ソードガッシュよりスピニオンが出撃した。無限に広がる宇宙を背に青い一閃が煌く。

『おいジョン、敵さん、相当多いぜ?』

レーダーに映る敵ギアードは20を超えていた。ソードガッシュに搭載できるギアードはせいぜい15機。だが、状況が状況なだけにそれは仕方無い事だ。

だがそんな状況にも関わらずルースは臆せず、むしろこれから起くる戦いに胸を躍らせるような感じだった。不謹慎ではあるが。

『ルース、ここは俺達に任せてスピーオンで敵を振りきれ！ そしてあの馬鹿デカイ奴に一発

食らわせてやれ！ 出来るな！』

『ああ、任せろ！ 死んだら承知しねえぞ？』

『誰に言つてやがる』

ジョンは親指を立てて白い歯を剥き出しにした。それを見てルースはもう何も言う事がない事を悟ると敵ギアードの群れへとスピーオンを突っ込ませていく。それをジョンや他のパイロット達は援護する形で後に続いて行つた。

ソードガッシュのブリッジは敵の分析で大忙しだ。オペレーターが必死になつて分析に勤しんでいる。

副司令であるマリアもオペレーターを務めていた。

「全ギアード出撃！ ルース機だけ先行しています！」

「スピードはスピニオンが一番だ。20機以上のギアードを突き抜けられるのは奴しかいない」

20機以上もいる所を真正面から突つ切りうとするなど自殺行為もいい所だ。しかしセイバース隊の誰もがそれに口を挟まない。今日から配属となつたマリアはそんな光景に驚いていた。

「信頼、してるんですね」

マリアはエオードのすぐ隣、副司令席にいる。エオードは何も言

わなかつたがそれが

答えたとマリアは悟った。

「敵戦艦の主砲発射まで、後5分！」

「くつ…時間は無い！ ソードガッシュ前進！ 多少の被害は構わん、突っ込め！」

「了解！」

本来、戦艦は前に出るべきではないがそんな悠長な事を言つている場合ではない。

「大都市に向けた主砲が、一いち方に来る可能性は考えられないでしょつか？」

マリアは考えていた。これがセイバース隊の精銳を一掃する作戦ならばそれも有り得ると。だがエオードは首を横に振った。

「いや、それは無い。あの手の輩はやると言つたら必ずやる」

豊富な経験からエオードはそう断つゝとする。確かにあのレサティアとかいう女は危険だ。普通じゃない。絶対に禁止とされてくる一般市民への無差別攻撃をしてしているのだ。

「それはそうと、ルー君は大丈夫なんですか？　たつた一機である大群に…」

「マリア君、見ておくといい。奴が「青き一閃」などと呼ばれている所以を」

『撃て！』

2体いるレノスの大型ギアード、「ヘルム」の銃撃をそのスピードでスピニオンは避けまくっている。

『くそつ、何で速さだ！』

『おらあ！ 邪魔だ！』

『！』

一時の方向から来るスピニオンに2体のヘルムは必死にビームブラスターで撃つが、全然かすりもしない。

『HYU-!』

高速でその2体に迫るスピニオン。ルースは確実にビームブラスターの照準をヘルムに合わせた。そして…

『なつ…』

『BANG!』

スピニオンの左手のビームブラスターが火を吹いた！

『う、うわああああああああああ…』

コクピット部分にビームが命中したヘルムは爆発音と共に宇宙に散つていった。

『YES-!』

勢いよくルースはスピニオンを巨大戦艦ヘルシャークナルへと突き進むのだった。

青く輝く一閃が、次々にとレノスの機体を避け、撃破するのをまるで映画でも楽しむように見つめる女性、レサティア。微笑みながらブリッジでその様子を見る彼女は、スピニオンが迫つてくるのを望んでいるようにもれる。

「フフ… わすがは「青き一閃」と呼ばれるだけはあるわね」

自軍の兵が、次々に倒されているのに彼女はまったく動じていない。その余裕の笑みは不気味な物を感じさせる。

「でも、もう時間がないわよ？」

『ビーム発射まで、後… 1分です…!』

『チッ、もうそんな時間かよ…?』

セイバース隊のパイロット全員に残酷な通信が響き渡る。ジョンは冷や汗をかくのを感じた。

『くつ…』

その不意を突かれたのか、ジョンは敵のビームを防御する形に持ち込まれてしまう。そして、ジョンの目の前に彼の考えもしない光景が広がつていた。

『……おこおい、マジかよ…』

レーダーに映る数の敵の表示が増えていく。それは一いつや一いつび  
ころではない。おびただしい敵信号の点が  
どんどん現れていく。

『「こいつら……さらに増えてる……！？』

ルースやジョン達が落としたギアードはおよそ10機。しかしへ  
ルシャークナルから更に出撃してきたギアードは推定50機。合わ  
せて  
60機超。セイバース隊の機体の数は残り12機、とても勝てる数  
では無い。ジョンは回りの仲間と陣を組み防戦一方となってしまつ  
た。

『うわあああ！』

レノスのギアード・フライヤのビームブラスターが、セイバース  
の大型ギアード「バーム」に直撃する。その機体は爆散して  
宇宙のもぐずの一つとなつた。丁度、ソードガッシュュを守っていた  
セイバース隊員を襲つた悲劇だつた。

『うわああ！』

『助け……』

ブリッジでは、その場面を間近で見たマリアが顔を青ざめる。そ  
んなマリアを見てエオードは声をかけた。

「君は、あまり戦場に出た事は無いのだったそうだな  
「ええ……。事務でしかたから……」

そんあ話をしている内にオペレーターの口から次々と現実を突きつけられる。

「敵ギアード、さらに増大… 20機です。我々との数、約60は違います…。ビーム発射、30秒前です…」

メインオペレーターも、平静を装っているが明らかに顔は青ざめている。何故なら、彼らにとつてこんな絶望的な状況は初めてだつたからである。エオード隊長は歯を食いしばって仲間の死を悔やむ。

「駄目押しか… 元より勝てる相手では無かつたのか… くそつ！ 初めからこうするつもりだったのか… ふざけおつて…！」

余裕の正体を明かしたレサティアは、座席から立ち突然笑いだした。純真無垢な子供のように、まるで遊びを楽しむような、そんな笑い方を彼女はしている。

「アハハハハハハ！！ ハハツ、ハハハ！」

ヘルシヤークナルの主砲エネルギー充填が終わろうとしている。そう、レード星大都市の最後が迫っているのだ。

『 19 … 18 …』

絶望のカウントダウンの中、必死に戦うセイバース隊。ジョンは仲間達を必死に守り、エオードはソードガッシュに

迫るレノスのギアードに必死の抵抗を強いられている。

そしてルースは…

『くつむおおおおおお…』

スピニオンのスピードを最大出力まで上げてヘルシャークナルに迫る。しかし、その距離はどう計算しても後20秒はかかる。それにレノス兵の守りも厚くまさに絶望的であった。

『8…7…6…』

『間に合へ……あそこには戦争には関係ない人たちがいるんだぞ？

スピニオン、頑張れ！！！ 早く…もつと早く…』

『邪魔させるか！』

ルースの嘆きも空しく、スピニオンの動きを止めようと周りに5機のギアードが囮む。…もう、間に合わない…

『やめろ……やめろおお… つおおおおおおおおおおおお…』

まるで星が爆発でもしたかのような音が光と共に宇宙の戦場に響き、ヘルシャークナルから放たれた主砲は、寸分の狂いも無くレード星の大都市に向かっていく。そして間もなく、主砲は大都市を焼き払った。

跡形も無く、全てを消滅させて…

巨大戦艦ヘルシャークナルの主砲によりレーデ星の大都市は焦土と化した。その事実はセイバース隊全員を絶望の淵へと追いやった。

故郷を破壊された者、ヘルシャークナルの強大さ、自分たちのせいで大都市が破壊された責任感、様々な気持ちが隊員に駆け巡る。その中でも一番間近にいて止められなかつたルースに走る衝撃は一番大きかつた。

『…………あ……あああ、あああああああああああああああああああああ……』

彼の中で“何か”が弾けた。それは怒り、悲しみ、悔しさ、様々な感情が混ざりあつた  
複雑で形容の出来ないモノ。

『なつ、何だあのスピニオン!』  
『スピニオンが輝いていやがる!』

ルースの人間とは思えない咆哮と共にスピニオンが眩しく輝いた。  
本来、スピニオンに光り輝く機能は無い。  
そもそもギアード自体、そのような機能は無い。しかし何の冗談かいきなりスピニオンは輝き出した。だが変化はそれだけではなかつた。何とルースの髪が青から金色へと変色していく。

『許さねえ……お前ら……お前らあああああああああ……』

憎悪に満ちたルースの顔は今までの彼からは想像もつかない歪んだ形相だった。呪詛のように放たれる言葉は目の前にいる敵達に、そしてその奥にいるヘルシャークナル、そしてそれに乗るレサティアに。

『……どけよ』

『へ、へへつ、どんな機能かは知らないが5機に囲まれて勝てる訳が』

『』

それは一瞬の出来事だった。

スピニオンの前に出てきた一機のヘルムの胴体から拳が突き出た。その拳はスピニオン。周囲の者達にはスピニオンがいつ接近し、ヘルムの胴体を拳で突き破ったか分からなかつた。知覚できなかつた。深く

突き刺さつた腕を引き抜き、既にパイロットのいないヘルムを滅多打ちにし、ビームを撃ち爆発させる。

それは死者になろうとも殺し、消し去りうといふ意味が取れた。レブドア隊のパイロット達は目の前にいる理解不能の存在が理屈抜きで怖かつた。

神々しく光り輝くスピニオンを、レブドア隊のパイロット達は地獄に住む悪鬼にしか見えなかつた。

『ち、ちくしょおおおおおおおおおお…』

『馬鹿、よせつ！…』

恐怖で焦つたのかフライヤに乗る者がスピニオンに攻撃を仕掛ける。だが音速を超えるスピードを誇る

フライヤの接近には勝てないだろうと周囲は“期待”、いや、“望んで”いた。

しかしその淡い想いは一瞬で打ち崩された。スピニオンと交錯し

たフライヤは数発の拳を叩き付けられ

爆発、宇宙へ散つていった。たつた一瞬の内でどうやって音速のフライヤに攻撃できたのか？ だがこれで

今のスピニオンが尋常ではない事をレブドア隊のパイロット達は確信した。だから一田散にその場から

## 逃げ出し始める

『逃げるな』

だが、逃げる事すら敵わなかつた。

スピニオンは逃げ惑う敵ギアードを次から次へと破壊していく。それは一方的な虐殺だった。

普段のルースならばこんな事はしないだろう。命を命とも思わない常軌を逸した暴虐。あつという間に5機のギアードはスピニオンによって無残に破壊され、散つていった。だがそれでもルースの怒りは治まる事を知らない。

「おいおい…何が起つてるんだ？」  
ルースに…」

ソードガッシュュの格納庫。今は退却したジョンがモーターでスピニオンの謎の現象を見ていた。もちろんソードガッシュュにいる誰もがこの異常な事態に驚きを隠せないでいた。

『一体…ターニア、スピニオンにあのような装置があつたとは聞い

てないぞ！？』

「しつ、知らないよ隊長。あんな機能付いてる訳がない！」

整備班長のターニアでさえ、今スピニオンに何が起こっているのかわからなかつた。

「通信は？ マリエーヌ君！」

「それが…どうやっても繋がらないみたいなんです」

オペレーターに聞く所、まるでスピニオンが通信妨害でもしているかのように一切通信が繋がらないのだという。その間にも輝くスピニオンはその神々しさとは裏腹に鬼神の如く敵を一方的に殺していく。普段のルースを知る工オードは、スピニオンの戦いぶりが信じられなかつた。

「ルース…お前は一体…？」

「大佐！ レサティア大佐！ このままではあの化け物がこちらに…！」

ヘルシャークナルのブリッジでも、突然謎の変化を起こしたスピニオンを見て恐れる者が多いだつた。しかしただ一人だけ光り輝くスピニオンを見て笑う女性がいた。もちろん、レサティア＝ヴォルゲインである。

「大丈夫よ。ここは私が出るから、全機に撤退するように伝えて」「まつ、まさか大佐自ら…！」

「フフフ」

その笑みは女神のよつで、悪魔のよつな一面性を帶びていた。

本能のままに狂い、レブドア隊のギアードを片つ端から破壊しそくすルース。しかしどうやっても通信ができないはずのコクピットに声が響き渡る。

『もう少し落ち着いたらどう? ルース・ドラッグ君?』  
『……? その声…その声…その声ええええ…』

その声は先ほど聞こえた女性のものだった。美しく、それでいて身震いしてしまつ艶のある声色。しかし今のルースには殺意を沸き立たせる声にしか聞こえない。彼の顔が、普段彼を知る者なら顔を背けたくなるほど憎悪に歪んだ。大都市の、多くの命を奪つた張本人がすぐ近くにいるのだから尚更であろう。

『ビルにこやがるつ！？』  
『殺すッ！！』

『……そんな事も気づかないので、後ろにいるじゃない。さつきから』

彼が、スピニオンが振り返ったその先には一体のギアードがあつた。白銀に煌き、後ろにある羽のようなパーツはまるで天使、いや、女神を思わせる神々しさと神秘さを兼ね備えていた。ルースは不覚にもその美しさ

に一瞬目を奪われた。それがとても屈辱だった。

『それでも本当に「青き一閃」と呼ばれているの？ まだまだ坊やね』

（な…いつから後ろに！？ レーダーにも出なかつたし、それに機体の影すら見えなかつた。あんな…あんな目立つ機体なのに…）

ルースはあと数年で成人とは言えまだ子供だ。だがそれでも「青き一閃」と呼ばれ並のパイロットなら相手にもならない実力を持つている。それをあつさり後ろを取られたことによりルースは言い知れぬ恐怖を感じそれが上手く作用して落ち着きを取り戻していた。それと同時にスピニオンのオーラのような輝きは消えていき彼の髪の色も青に戻つた。するとルースは辺りを見回す。

『…………？？ 何だ？ 僕、今までどうしてたんだ…？ それにあのギアード…』  
『どうしたのかしら？ ルース・ドラッグ君』  
『…！ その声、お前は…！』

ルースはまるで先ほどまでの記憶が無かつたかのように振舞う。それは事実だつた。ルースには大都市が焼かれる所からここまで記憶が無かつた。ルースにしてみればいきなり目の前に謎のギアードが現れた  
ように感じたのだろう。不思議な体験にルースは訳が分からなかつた。

「何だあのギアード？ あんなの見たこともない！」

ソードガッシュの格納庫にまた衝撃が走る。レノスのギアードにも精通しているターニアでさえレサティアの乗る「レンジェル」という機体は知らなかつた。そしてその神々しさと共に感じる異様さは量産機では有り得ないことをターニアは悟つた。予想されるのはあれが隊長機、それも特注品だということだ。

「スピニオン、元に戻つたみたいだぜ？　あの謎の輝きも引っ込んだけどな」

ターニアと共にモニターを見るジョンは嫌な予感がした。あの異常な強さを発揮したスピニオンですら謎のギアードの接近を許してしまつたのだ。只者ではないジョンは感じていた。

「ルース、気を付けろよ……！」

謎のギアードと対峙して、ルースはそれに乗るレサティアに怒りを含ませて尋ねた。

『どうして…どうして関係ない人達を！　自分が何をしたのか分かってるのかー！？』

一般人をどんな理由であろうと殺すのは条例違反だ。銃殺刑は免れない。だというのにレサティアはそれをいとも簡単にやつてのけた。もみ消そうにも規模が大きすぎる。となるとレサティアはそれが許される信じられない権限でも持つているのだろうか？

だがそんなことルースにはどうでもよかつた。人として、ルースは今まで平和に暮らしてきた人々の命をあつさり奪つたレサティアがどうしても許せなかつた。

『分かつてゐるわ、あれで何人死んだのかしら？　一万…10万…100万？』

『ふざけるな！』

まるでゲームでいい結果が出せたかのように言つてレサティアにルースは怒りの声を上げる。レサティアはそれを聞いて心外そうな顔になる。

『あらあら。ねえルース君、もしこれが君の為にやつた事だとしたら……どうする？』

『なつ！？　俺の為だつて！？』

『そつ、君の為』

ルースは呆然とするしかなかつた。いくら冗談にしても行き過ぎている。あの大都市を、罪もない人々を消し去つたのは、自分の為だと言う。何を言つてゐるんだこの女は。

『は、ははは！　何言つてゐるんだ、そんな馬鹿なことつてあるかよ！』

スピニオンが先に出た。拳の甲にあるエネルギー・ジェネレート装置を稼動させると拳がエネルギーを凝縮した膜に包まれる。重装甲のギアードですら突き破るスピニオンの武装エネルギー・ジェネレートパンチ。スピニオンはそれをレンジジェルに食らわせようとすると、レンジジェルは紙一重で避ける。

続けてスピニオンは左腕に付いている腕ほどのサイズであるビームシールド、それに内臓されたビームブラスターを連射、しかしそれも避けられてしまつ。

『中々の連撃。人型であるスピニオンでそれほどのスピードを出し続けるとGの負担が大きいでしょうに』

『くつ……』

フライヤのような飛行形態ならば音速のスピードを出してもGの負担は少ない。しかし人型であるスピニオンしかもルースのスピニオンは特別製。スピードもフライヤに迫るものがある。音速に近いスピードならばGの負担が大きい。ルースはもう戦場に出て30分以上になる。身体の負担は限界に近づいている。ルースの息は荒い。

『くそつ……しかもこいつ……』

それでもスピニオンの動きはそこまで落ちてはいなかつた。にも関わらずレンジェルは紙一重…いや、紙一重に見せかけて攻撃を避けていく。たつた数撃でもルースはレサティアが、レンジェルがどれほどもののか解りはじめていた。

『でも、さつきの君の方が良かつたわよ？ 憎悪に満ちた、憎しみの塊のような…ね。フフフフ』

『?? 何の事だ！』

『…やはりね。憎しみによる「力」の発動は憶えていない事が多い

…』

『だから、一体なんなんだ！？』

ルースにはレサティアの言葉の意味が解らなかつた。レサティアは光り輝いていた時のスピニオンのことを言つているのだろうが、ルースには知りようがないから仕方が無い。だがその原因すらレサティアは知つているようだつた。

『さつき私は大都市を消滅させたのは君の為だと言つた。それは君の「力」を引き出す為に必要不可欠なことなのよ』

『俺の力…？ でたらめなこと言つて…』

スピニオンの拳が遂にレンジエルに命中する… のだが、レンジエルには傷ひとつ付いていなかつた。スピニオンの拳はレンジエルの手前で見えない何かに阻まれていたからだ。

『なつ…バツ、バリアか！？』

『少し違うわね。このレンジエルにはどのような攻撃手段も寄せ付けないし、受け付けない。そんな絶対的なフィールドを常に身に纏つているのよ』

『な……？ なにを…言つてるんだ？』

拳が阻まれたことへの説明を聞いたルースだつたが、まるで理解できなかつた。この女は一体何を言つているのだろうと。未知の機体に未知の能力。そして、まるで得体の知れない存在にルースは思考をパンクしかけていた。

『フフフ……信じられないのも無理ないわ。信じられないついでにもう一ついいもの見せてあげる』

『！？』

スピーオンは突然動きを止めた。いや、止められた。スピーオンの周囲に何かが浮かび上がった。それは物語で見るような魔法陣のようなもの。

『なつ、何だこれっ！？』

『そうね…【結界】とでも言つておこつかしら。わかり易く言つと君のスピーオンは鎖でがんじがらめに縛られたようになつてているよ。絶対に抜け出す事は出来ない』

『なんだって！？ そんな事がギアードに…』

彼女の言つ通り、どんな事をしてもスピーオンは身動きが取れなかつた。最早レンジェルのしていいる事はギアードの領域を逸脱している。そんな馬鹿げた事をするギアードなどルースは知らない。

『ルース君、今ここにある事が真実。この宇宙に説明できないことなんて幾らでもあるわ』

『…こんなテタラメ……くそつ、動け！ 何で動かない！？』

ルースには彼女の言う事が理解できなかつた。彼の見る限りレンジェルはれっきとしたギアードそのもの。しかし今、まさに目の前で信じられない事をやつてのけているのだ。信じざるを得なかつた。それがどれだけ滅茶苦茶な事だとしても。

『くそつ……ハハツ…滅茶苦茶だよアンタ。…殺せよ』

勝負は決した。ルースは死を覚悟した。しかしレサティアの口から予想外の言葉が飛び出した。

『殺さないわよ、君は』

『……は？』

一瞬、ルースは何を言ったのか理解できなかつた。しかし、これほど超常的な力を持ちながら今まで殺されなかつた事を考へると、自分は初めから遊ばれていたのだと勘付いた。だがそれでは彼女の意図が解りかねる。

『アンタ……一体、何がしたいんだ……？』

『……君は私と同じ、【選定者】なのだから……』

『選定者……？』

初めて聞く言葉にルースは首を傾げた。こんな馬鹿みたいに強い女が自分と同じ？ ますますルースは訳が分からなかつた。

『その選定者ってのは何だ！？ それに、俺はアンタなんかと同じじゃねえ！ ……アンタみたいな悪魔とは！』

『フフ、今は分からなくてもいいわ。でもその内、嫌でも分かる事になるのよ…。君は大いなる渦の中心にいるのだから…』

『…逃げるのが！？』

意味ありげな言葉と共に、スピニオンに背を向けるレンジエル。羽ばたく翼は天使のように見えるはずなのにルースにはそれが悪魔の翼にしか見えなかつた。

『ごめんなさいね。私、今からレード星にある君達の基地を全部制圧しなきゃならないの。もう少し君と遊んで

いたかつたけど、これ以上は何も意味を成さない事が分かったから  
『…降下する時には無防備になるぞ。ソードガッシュの主砲で、ア  
ンタの戦艦を撃ちぬくぜ?』

通信マイク越しでレサテイアに言つただが彼女は何故か笑う。そ  
れがルースの癪に障る。

『何がおかしい』

『ヘルシャークナルは今も君達の戦艦に照準を合せわしているわ。私  
がいいと言えればいつでも撃つ事ができるのよ?』

『そんなハッタリ…』

『ハッタリじゃないんです』

突然スピーカーの「クピット」に響き渡るのはレサテイアとは別の  
女性の声。それは出撃前に会つたあの女性の  
もの。

『え? その声…マリアさんか?』

ルースのコクピットに通信してきたのはマリア。準じてヴィジョ  
ンが浮かび上がった。彼女は先ほど見た笑顔と  
違つてやや青白い表情をしていた。

『敵の戦艦からは、まだエネルギー反応があるんですね。だから最  
初から2発分のエネルギーを充填してましたん  
です…』  
『そ…そんな…』  
『そういう事なのよルース君。もう、君達に出来る抵抗はなくなつ  
たのよ』

レンジェルはスピニオンから離れていく。だがルースはそれを許さない。例え身動きがとれなくても。

『レサティアアツ！』

『そう、猛りなさい。そして、私を恨みなさい。君が私を殺せるだけの力を手に入れられるか：期待しているわ』

やがてレンジェルの姿はヘルシャークナルへと消えていき、それと同時にヘルシャークナルはレード星へ降下を始める。レンジェルが離れ、スピニオンを縛り付けていた陣は消えて動きがとれるようになつた。しかしルースはもう追う事はしなかつた。敵が自分達の惑星へ降りようとしているのを、ルース達は見ている事しか出来なかつた。

『田の前に…田の前に敵がいるのに、敵が俺達の星を消そうとしているのに、何もできないなんて…何もできないなんて…！…！』

自分はまだ動けるのに、敵がこれから侵略をする所をただ見る事しか出来ないのである。これ以上の屈辱は無い。

完全な敗北。ルース達セイバース隊はあっけなく負けてしまった。スピニオンはずつとその場で動かずルースは歯を食いしばりヘルシャークナルが降りていく所を見ていた。この敗北を忘れないように、あの敵を中心刻みつけるよつ。

しばらくして、スピニオンにソードガッシュが近づく。仲間達のヴィジョンが次々と現れ心配の声をかける。彼ら

の声を聞けたのが心の助けだった。

… 負けた …

ルースはぽつりと呟いた。ここまで圧倒的に負けたのは、青き一閃と呼ばれてから初めての事だった：

—おい、おいルース!

ソードガッシュの格納庫。回収されたスパイオンから、降りるとルースはいきなり壁を拳で殴りつける。何度も何度も。それを見たタニアはすぐに腕を掴んだ。拳からは血が滲んでいた。

「馬鹿な事を…何やつてんだお前！」

怒鳴られても反応の無いルース。俯いて何かを呟いているのをタニアは注意深く聞いた。

「負けだ……」  
「えっ？」  
「俺達の負けだ……。何も、出来なかつた……」  
「ルース」

悔しさを顔に滲ませてルースは静かに格納庫を出て行く。彼を止める者は誰もいなかつた……

「戦死者、10人。読み上げます…」

ミーティングルームではマリアが戦死者を読み上げる。それを隅でルースとジョンは聞いていた。15人中10人パイロットが死ぬ事は隊にとつてかなり深刻な事だ。ルースに次ぐ実力の持ち主であるジョンも健闘したが全員を守りきる事は出来なかつた。ルースと同じく落ち込んでいるはずなのに、ジョンはルースを慰めようと肩に手を置いた。

「まあ落ち込むな。生きていればいつか奴らに一泡吹かせる事が出来る。死んだ大都市の人々やみんなの為にも頑張ろうぜ?」

「……」

精一杯の慰めも、ルースには氣休めにもならなかつた。普段、風のようにおちやらけた感じのルースが塞ぎこむように俯いている。ルースはヘルシャークナルの主砲を止められなかつたのが自分の責任だと、自分が弱かつたから大勢の人を亡くしてしまつたのだと、責任を感じているのだ。決してルースだけの責任ではないといふのに…。

「相当へこんでいるな…」

ジョンの隣にいたタニアは、小声でジョンに言つ。ルースの拳を見るとまだ手当てをしていなかつた。

「……ルースは、昔から背負い込みすぎる癖みたいなものがあるか

らな……。無理もない……」「

「ルース、このまま潰れなければいいけど……」

「諸君、聞いてくれ

マリアが戦死者を読み終えるとその次にエオードが口を開く。その口はいつもなく重い。

「……たった今入った情報だが、レード星に残した第一部隊はレブニア隊によつて壊滅させられたらし……」

ミーティングルームにはセイバース隊の隊員がほぼ集まつていた。だからどよめきは室内を覆つた。これでセイバース隊で生き残つたのはこのソードガッシュью一隻のみとなつた。クルーは絶望感に打ちひしがれる。

「……もう我々が帰る場所は無くなつた。…我々はこれからセンドラド本部へ赴き、これから指示を仰ぐ

いくつもある惑星の内、センドラド軍本部に近いのはレード星だ。孤立してしまつたソードガッシュьюはもう本部へ向かうしかない。その場の全員が納得せざるを得ない中、一人だけ声をあげた。ルースだ。

「隊長……」のまま、このままあいつ等を野放にしていいのかよ！？俺だけでも「お前も戦つて感じただろう……お前ほどの男をまるで相手にしないレサティア・ヴォルゲインの強さを……」「くつ……

ルースの叫びは、エオードの怒声にかき消された。彼の言う通り、今まであのレンジョルと戦つたとしても満に一つとルースに勝ち目はないだろう。ルースもそれが分かつていたが、認めたくなかった。

「落ち着けルース！ それじゃまるつきりガキだぞ！」  
「……くそ……くそつ……」

ジョンになだめられて、ルースは頭を搔き毛つて机に突っ伏す。ルースの悲しい叫びはクルーの心を締め付ける。誰だって、出来る事なら今すぐにでも飛び出していきたいと思っている。だが、あまりにも敵は強すぎる。だから、顔を俯かせる。それがとても情けなかった。

「まだ諦めてはいかん。我々は生きている！ 悲しむ暇はない、奴らの好きにさせる訳にはいかんっ！！ 我々は散つていった者達の為にも生きて、戦わなければならぬ……！」  
戦わなければ……」  
「隊長……」

何度も机を叩くエオード。その叫びは鎮痛なものだった。それを見てルースは自分がどれだけ子供だったか思い知る。エオードだって本当は今すぐにでも追撃に向かいたいはずなのだ。だがそれをしないのはそれが無駄な事だからだ。そんなエオードの姿を見てしまったらもう短気を起こす気にはなれなかつた。

「これより……セイバース隊はセンドラド軍本部へと向かうー」「「ア解ーー」

ソードガッシュュは宇宙を駆ける…悲しむ暇をえなく。

戦いは始まつたばかり…

ルースの悲しく空しい戦いは、まだ始まつたばかりなのだ…

TO BE CONTINUED…

## #1 · Departure vol.4 (後書き)

第1話はこれで終了です。いかがだったでしょうか? 色々背景やらキャラの詳細やら何やらすっ飛ばしてしまった事は否めません。それはこれからやつしていくにせよ、そこら辺はちょっと失敗してしまったかなあと今頃反省してしまっています。駄目ですね、全くなんか愚痴ばつかですみません。それではまた次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6365a/>

space war period GEARD

2010年10月20日18時16分発行